

奪冠。

混沌からの再生へ。



撮影・星 宏樹

強豪と言われるチームでも常に安定した内容で結果を残せるわけではない。それは、チームの方向性を見失いそうになる時ならばなおさらのことだ。

彼らは苦しんでいた。前期リーグ終盤の連敗でチームの調子は不安定なものととなり、6月にはリーグ最下位の筑波大に敗戦を喫し7年間続いていた総理大臣杯出場を逃した。Jリーグチームに挑戦できる天皇杯への切符も落とした(※注)。

明確な目標を見失ってしまった彼らは、この夏の間は何をモチベーションにしてトレーニングに取り組んできたのだろうか。そのヒントは練習試合の内容に隠されていた。

駒大のサッカーを再確認し取り戻すため、特に高校生などの格下相手などでも必要なことは徹底した。

こぼれ玉は必ず押さえ、しっかりと守ってボールを奪った。手間をかけずに前線へ、ロングボールからサイドに開いてのドリブル勝負、FWがポイントをつくったら素早くサポートし一気にフィニッシュ。

実戦形式のトレーニングはチーム内の競争を生みだし、何よりも1人1人のポジションと役割をもう一度明確にしたことはプラスのイメージへ繋がったのではないだろうか。

ユニバーシアード代表に選ばれた選手への期待も忘れてはいけない。効果的なポジショニングで後方をサポートするボランチの菊地。得点感覚に優れた高崎。ケガのアクシデントで参加を見送ってしまったが、小林の馬力ある突破力も忘れてはならないだろう。

そして、一番大切なのはこれらを90分間続けること。

そのためにはスパイクの先まで繊細な神経を巡らせるほどの集中力、大胆なゴールへの感覚、緻密な守備への思考、そしてボールの行方に祈りを託すほんの少しばかりの幸運を。

そこには審判の不遇に泣かされようとも、崇高な論理になわなかつた内容だとしても、たったの「1点」で全てを超越してしまふ世界が待っている。

秋田監督や偉大なる先輩が与えてくれた勝者のメンタリズムを胸に、この夏の成長の証はリーグ優勝という形で残すしかない。

まだ地獄も悲劇も見ていないのだから。

(吉岡克洋)



※注 東京都サカートーナメント(兼天皇杯予選) 結果

学生系の部・1回戦

6-0 日本ウェルネススポーツ専門学校 大量6得点で圧勝

2回戦

2-3 明治大学 退場者2人を出し、延長戦の末逆転負け